漢人あきこ

フライパンひとつ持って

政治が「自分ごと」になるとき

目次

06 フライパンひとつ持って家を出た　あの日
——二十歳、親からの独立

08 どうして女は生きづらいのか
——幼い頃から感じていた疑問

10 自分の中にある「おぞましさ」との出会い
——ボランティアを始めた理由

12 自立とは助けてくれる人がたくさんいること
——出産とどろんこ保育所

15 子どもの未来のために動き出す
——子育て、そして新たな世界へ

18 おかしいと思ったら変えればいい。それが政治
——フィンランドで学んだこと

21 市民として見た「市議会」を市民に開く
——小金井市議会議員としての十六年

24 小金井の「はけ」への思いを届けたい
——今の想い

緑中央通りにて（2021冬）

フライパンひとつ持って家を出た　あの日——二十歳、親からの独立

大学三年生の春、新学年の前期授業料として親から手渡された九万円を握りしめ、不動産屋の前に立っていた。

「早く家を出たい。ひとりで暮らしたい」

漢人あきこ、二十歳。小学校教師を目指し、一浪して入った東京学芸大学だが、大学に二年間の休学届を出し、その九万円を敷金礼金に充てた。

入学後は最低限の授業に出席するかたわら、ボランティアやアルバイト、学園祭の実行委員、サークル活動に明け暮れていた。

地方の大学への進学を認めなかった両親。実家は大学からそう遠くない武蔵村山市。正面突破ではおそらく説得できないだろう。

「先輩に頼んで車を一台出してもらって、そこに最低限の自分の着替えや荷物を積んでこっそり家を出ました。両親には、すべて整えてからの事後報告です。生活費は自分でやりくりする、大学も復学する、敷金礼金のみ援助してほしい。そう伝えたら、両親は、もう仕方がないという感じで諦めていたようでした」

国分寺駅の交差点近くの四畳半一間、トイレ共同の風呂なしアパートがこれからは自分の家だ。

誰かに何かを理由もなく強いられることや、自分の意に反して制限されることが、子どもの頃からずっと嫌だった。

「そんなことは当然。誰だって縛られたくない」

きっと誰もがそう思うだろう。だけどそこに疑問をぶつけたり、反発したりするにはエネルギーが必要だ。私たちはいつの間にか、そんな気持ちに蓋をして、見ないフリをすることに慣らされてしまっている。

「諦めて終わりたくない。いつもそう思っています。だから、どんなに大変な状況でも、どうやってポジティブに自分を保つかに発想を切り替える。そうすると、そんな空気になって自分も周りも動き出すんです。不思議ですよね」

フライパンを使うたび、二十歳の頃の気持ちが蘇ってくる。自立を支えてくれたフライパン。

「親に内緒で家から持ってきたフライパン。料理も家事もできなかったけど、シンプルでとても使い心地がいいこのフライパンを、今でもずっと使っています」

使い馴染んで、気がつけば40年

どうして女は生きづらいのか——幼い頃から感じていた疑問

生まれは静岡県の山奥、天竜川の支流のほとり。国鉄職員だった父は鉄道の電化工事を担当しており、当時でいうところの「転勤族」だった。幼い頃は電化工事が終わると静岡県内をその度に引っ越した。

東京へきたのは五歳の頃だ。府中市の北、現在の西国分寺駅に近い国鉄アパート（社宅）での暮らしが始まった。団地のようなその敷地内で、放課後には異年齢の子どもたちが集まって遊んでいた。一番楽しかったのは小学校三、四年生の頃。学校の同級生、アパートの異年齢集団、それぞれにおもしろかった。

「遊びでは、弱い子の味方のガキ大将、頼りになるお姉ちゃん的な存在。みんなをまとめて遊んでいましたね。その頃の担任が女性の先生で、一人ひとりに寄り添って話を聞いて受け止めてくれる人だった。あんな大人になりたいと思ったのもその頃です」

父の母、祖母が夫を早くに亡くし、女手一つで父を苦労して育てたこともあり、父は何かというと「女もちゃんと手に職をつけなければいけない」と言って聞かせた。小学生のあきこにとって、三十歳前後の女性の先生は身近な人生のモデルだ。「先生なら生活も安定するしね」と大人びた視点で夢を選んだ。

小学校2年の秋、国鉄アパートの公園で（1968）

理不尽なことがあると「どうして?」と友達にも先生にも納得するまでたずねる子だった。中でも、「女のくせに」と言われたり、同級生がいじめられたりしようものなら黙ってはいない。曲がったことが大嫌い。

取っ組み合いの喧嘩もした。低学年の頃から学級委員、高学年になると児童会の役員もした。

漢人家は三人きょうだいで、あきこは長女。ひとつ下に弟、そのまたひとつ下にも弟がいる。

「お姉ちゃんとして扱われることが嫌でした。弟が小さい頃は面倒みるのも楽しいし、お手伝いもしていたけど、弟たちが成長しても『お姉ちゃんだから』『女の子だから』と私だけいろいろと頼まれて、弟たちは遊んでいる。そのことに反発していました」

父は、転勤になれば単身赴任をするようになった。今思えば母ひとりで三人の年子を育てるのは大変だったろうと理解できる。それに、一般的にまだ「家事は女の仕事」だった。でもそんなことは関係ない。

「どうして私だけなの? 女の子だからなんておかしい。家事なんてイヤ、料理も教わりたくない!」

型にはめられるのは嫌だった。「~だから~するべき」という縛りや押しつけには納得がいかない。

「女の子の色、男の子の色という決めつけも嫌で、私は緑が好きなのに!と思っていました。中学の時には先生に『生徒は勉強するもんだ』と言われて、『なんでですか!』とボロボロと泣いて抗議したこともあります。」

一方で、読書感想文は、大人が求めているものを書けば評価されるのがわかるから、嫌だと思いながら求められるものを書いていた。

「周りの固定概念に強く抵抗したり、合わせすぎたりしていると、本当に自分が好きなものやしたいことがわからなくなってしまう。それも嫌だったんです。本当は、緑だけじゃなくて、赤い色も好きだったし」

母は専業主婦。単身赴任で父親不在の家で、内職やパート、家事もやり、三人の子どもを育てた。昔は、そんな母が「女の子なんだから」と言うたびに、「女なのに女性差別をしている」と反抗心を持っていた。

「私、結婚したくない。結婚しないで手に職をつけて、ひとりで生きて行くんだ。そう思っていました」

あの頃、世の中には「女性の生きづらさ」があった。小学生の頃から、「女の子だから」「女だから」と制限されることに抵抗して、そういうことに巻き込まれないように生きてきた。しかし、六十歳になった今でも、世の中には「女性の生きづらさ」が残っている。

自分の中にある「おぞましさ」との出会い——ボランティアをはじめた理由

中学の途中で武蔵村山市に引っ越した。高校は家から通える新設校に進学。初めての生徒として一年目に入学したから先輩もいない。全てを仲間たちと作り上げた。部活動も、生徒会活動も、学園祭も、卒業後の同窓会も試行錯誤しながらみんなが楽しめる仕組みを考えた。ゼロから作り上げる楽しさを知った。

小学校では児童会、中学校でも生徒会に関わっていた。会長ではなく書記や会計。表に立ってみんなを引っ張っていくよりも、全体をサポートするほうが好きだし性に合っている。高校でも生徒会の役員になった。テニス部ではマネージャーを引き受けた。

教員を目指して東京学芸大学に入学したのは一九八〇年。「ボランティア」ということばが認知され、ボランティア団体も増えていた頃だ。好奇心が動いた。

「私もボランティアなるものを一度はやってみたいと思っていたとき、大学で、ある募集を見つけました。『神奈川県の施設で暮らす重度の身体障がい者の外出介助』でした。はじめてのボランティアの日、私は何も知らずにウキウキしながら現地に向かいました」

「ボランティア」ということばから、何か楽しそうだなと思い描いていたという。

「そのとき出会ったのは、重度の脳性麻痺の方たちでした。車椅子に乗り、体が硬直し、うまく動かせない様子に、私は言葉を失いました。異形の者として、全く受け入れることができませんでした。一生懸命話しかけてくれるのに、何も聞き取れません。周りの人たちはちゃんとコミュニケーションをとることができるのに。自分の驚きや戸惑いがおぞましく、何もできなかった自分にショックを受けました」

それまで全く知らなかった世界が目の前で展開していた。そこでの自分の反応に驚いた。自分を見つめ直した。自分の中に人を差別する感情があるのだろうか。もっと知りたい。介助を続けることに決めた。

「私はそれまで、学校でも地域でも障害のある方にほとんど出会ったことがありませんでした。」

中学生の頃、隣の小学校の前で、ある女性が車椅子に乗って何かを訴えていた。それが脳性麻痺で義務教育を受けられなかったことを訴えた「岩楯恵美子学校へ入る会」の活動だったと知ったのもその後のことだ。

「障害があっても、多様な個性の一つとして共に暮らす社会があれば、あんなに驚くことはなかったんです。日常から出会う場があれば、とも思いました」

そこから、改めて出会い直した。

小平市の通学支援の介護では、脳性麻痺で車椅子を使うコウタロウくんの小学校への送迎と学校での待機を、二十人ほどのチームを組んで交代で受け持った。

榎本きよ美沖縄旅行～与那国島「日本国最西端之地」（1997）

重度の身体障害のある三井絹子さん（施設を飛び出し地域で自立して暮らしていた）の介護にも関わった。絹子さんは二十四時間介護が必要で文字盤で会話をしていたが、出産し、障害のある人の自立生活の相談や支援をしていた。

時間が合えばどこへでも介護に行った。

「私は学生だからできるけど、これは社会や介護の仕組みを変えなければ持続するのは難しいと思いました。そんな中で、立川、国立周辺の障がい者や介護者が中心になってスタートした『三多摩自立生活センター』の設立にも参加しました」

その後、自身の出産を機に介護ボランティアを離れたが、二十九歳から榎本きよ美さんの出産後のサポートを再開。八年間、泊まり介護に通った。

「きよ美は大学の後輩のパートナーでした。脊髄小脳変性症という難病で、病気の進行で歩行が困難になり、気管切開もしました。亡くなる二年前まで彼女と仲間達と、毎年沖縄旅行に行きました。生きることとは何かを今も問いかけてくれる大切な仲間です」

自立とは助けてくれる人がたくさんいること——出産とどろんこ保育所

「私、結婚もしたくなかったし、子どもも産みたくなかった。生き方が制限されると思っていたんです」

一九八〇年代はまだ、育休も取りづらい時代だった。結婚や妊娠・出産を機に大半の女性が仕事を辞めざるをえなかった。

「どうして子どもがいると生き方が制限されるんだろう」と、ずっと疑問に思っていた。

しかし、大学の新聞会のある先輩に出会い、本町の「どろんこ保育所」を紹介され、考えが少し変化した。

「その人は学生結婚をしていて子どももいて、パートナーが赤ちゃんを抱いて大学を闊歩する姿がかっこよかったんです。私も子どもを産むのなら早いうちがいいという発想にガラリと変わりました」

二十三歳で四畳半一間から小さな借家に引っ越し、パートナーと共同生活を始めた。婚姻制度にも疑問を感じていたため、「お互いに一緒にいたいと思うから一緒に暮らす」という関係にこだわった。

どろんこ保育所の子どもたちと〜小金井公園梅林

休学中、さまざまな運動に参加した。優生保護法改悪に反対する女性の活動、強姦被害者の声を中心に構成されたカナダの映画『声なき叫び』の上映運動、在日韓国人・朝鮮人との交流、大学の学園祭実行委員の頃からの地域とのつながりや、ボランティアなどで出会った人たちに誘われ、小金井地域の市民活動にも参加していた。当時、政治的な活動に参加していると教員としては採用されないらしいと言われていた。大学に復学することは諦めた。

共同生活をはじめた年、ボランティアも続けながら、「どろんこ保育所」で産休代替えアルバイトの保育者として働きはじめると、子どもへの視点も変化した。

「子どもがいることがマイナスだけではないと体験的に知りました。そこで保育者として働いているときに感じていたのは、『子どもがいることで豊かな関係が築けている』ということ。どろんこ保育所の保育者たちや、そこに通う子どものお母さんたちから教えてもらいました」

「どろんこ保育所」は、親が共同で運営する保育所として立ち上がった。アルバイトとして入った頃には、保育者による共同経営に切り替わっていたが、保護者である親も会議に参加し、いろんなことを一緒に考え取り組んでいた。

二十四歳、自身も子どもを授かった。

同級の友人たちは大学四年生。卒論に忙しそうだったが、その友人たちや介護ボランティアで知り合った人たち、そして借家の大家さんも、みんなが心配してくれる。

借家に浴室はなく、しばらくは庭の小屋で水浴びをしていたが、心配した仲間たちが小屋を浴室に改装し、妊娠中、出産時、そして出産後も家事のサポートをしてくれた。

「出産もたくさんの友人、知人に見守ってもらい、一緒に楽しんでくれた。いい経験ができたと言ってくれました」

重度障がい者の地域自立生活の介護ボランティアを続ける中で、障害がある人でも、支えてくれる人がいれば地域で暮らすことができるし、子育てができると体験的に知っていたことも大きい。たくさんの人がチームでサポートすれば一人ひとりの負担も軽減できる。

「夜泣きなどはどうしようもなかったけれど、育児の不安や追い詰められた記憶はないんです。困ったらすぐに相談できるし、誰かが助けてくれる環境だった」

産後三か月で子どもを連れて保育の仕事に復帰した。子連れ保育は初めての子育てには恵まれた環境だった。

「保育所に行けば、子育て中の人や経験者に話を聞けました。一人っ子の娘も保育所でほかの子どもたちときょうだいのように過ごすことができた。親以外の大人がいる環境は、母親である私にとっても、子どもにとっても、いろんな立場の大人とつながることができてよかった」

どろんこ保育所は、保育者も「真面目に不真面目を楽しむ」場所だ。保育者が子どもたち以上に泥遊びやゴム段など、さまざまな遊びを楽しんだ。自然の中でどろんこになって育ち合い、差別もなく、食べ物に配慮する。保育される人と保育する人ではなく、保育者も子どもも保護者も、共に悩み、共に楽しむことができる場所だった。

みんながきょうだい、みんなが家族のようだった。

国分寺市本多の小さな借家の縁側で（1984秋）

どろんこ保育所でお散歩～
玉川上水陣屋橋

子どもの未来のために動き出す——子育て、そして新たな世界へ

子どもが小学校に上がる前に、国分寺から小金井市に引っ越した。教育が気になりはじめた。一九九〇年は、新しい学習指導要領が施行される年だった。改定された学習指導要領に「日の丸」の掲揚と「君が代」の斉唱が明記されたことに疑問を持った人たちによる「教育を考える小金井ネットワーク」に参加し、小金井市内の学校で強制をしないようにと陳情を出した。

男女で分けられた名簿についても、「なぜ男子が先なの?」と疑問を持っていたが、まあそういうものかと思い込んでいた。しかし、「男女混合名簿」に変わった学校もあることを知り、自分の子どもが入学する学校も変えられるのではないかと思い立つ。知人の手を借り発起人となって、「男女混合名簿の実現を求める陳情書」を出した。

「自分で初めて陳情書というものを作りました。議員回りもはじめて体験しました。その陳情が採択されたんです」

各学校が校長の判断で徐々に変えていくことになり、ようやく二〇〇〇年に小金井市の一〇〇%の学校で男女混合名簿が実現した。それまでに十年かかった。

「おそらくそれでも、小金井は早いほうです。『男女平等は日本の伝統を破壊する』というような、とんでもないジェンダーフリーバッシングもあった時代です。日本の伝統を壊すとか、右とか左とか、そんなことではない。素朴におかしいと思っただけなんです」

小学生の頃から感じていた、「女の子だから」という言葉に対する素朴な疑問。それと同じだった。「どうして男子が先で女子が後なの?」という疑問に、納得のいく答えがほしい。納得のいく答えがなければ、それを変えていく。当然のことだった。

「それに、小金井は女性の権利に関する活動が盛んだったと思います。一九八一年に市長が、妻ではない女性を同伴して出張に出かけたことでリコールが起きて議会が解散になり、女性議員が増えたことも大きかっ

た。全国で一番女性議員が多い時期もありましたし、今もベスト4。先輩たちが小金井の議会を女性に開いてくれました」

そして、三十二歳。子どもが八歳の頃、十年間の事実婚を解消し、シングルマザーとなった。

「パートナーとはずっと別会計。家事は二人で分担していました。お互いに納得して事実婚を解消しましたし、その後も近くに住んで友人関係は続いています」

それでも、挫折感は拭えなかった。ひとり親で子どもを育てながら働く環境は、整っているとは言い難い。

「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」（ひとり親のネットワーク）に参加したことも支えになった。ひとり親家庭支援制度も、使えるものは全て使った。児童育成手当、児童扶養手当、ひとり親家庭等医療費助成、就学援助などに助けられた。

「私は弱い立場にいたとは思っていませんが、貧困に追いやられるシングルマザーも多い。弱い立場にいる人が、人として誰もないがしろにされない世の中にしたいんです」

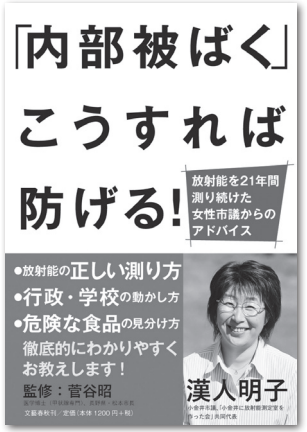
また、一九八六年のチェルノブイリ原発事故以降、

小金井市放射能測定器運営連絡協議会　設立総会（1990夏）

緑小学校の入学式（1990春）

放射能測定の要望を市民運動として展開した。「放射能測定器運営連絡協議会」として一九九一年以降現在まで行政と共に放射能測定を続けている。子どもたちの未来のためだ。

「放射能は見えない、匂いもしない、味もしないことが不安や恐怖を呼び起こします。見えないことを可視化して、どうすればいいかを考えれば、不安を拭い去り、するべきことが見えてくる。昨年からの新型感染症対策も根底には通じるものがあると考えています」



311後、放射能測定活動からのメッセージを出版（2012）

Column　私と漢人さん _ 矢澤朋香

議員にならないと出来ないことがあるから

2011年の東日本大震災で原発事故が起きるまで、私は市政に関心がありませんでした。放射性物質拡散で当時四歳の息子にどんな影響があるのか、心配でたまらなかった。幼稚園の保護者で議会に放射性物質についての陳情を出すことになり、議員の漢人さんと初めて会いました。漢人さんは放射能測定器運営連絡協議会でチェルノブイリ原発事故以来、長年活動をされていました。私は自分の不安を払拭したくて測定室のメンバーになりましたが、実際に数値を測定し自分が安心することで心配している友人に伝え、小金井市のためにも市内の農産物などを測定しようという気持ちが芽生え活動を続けています。

測定室の活動はボランティアですが、数年前、私が資格を取るための勉強をはじめると、「測定室の活動で自分の人生を制限する必要は全くないからね」と活動時間の減少を憂う私に細やかな気遣いをしていただきありがたかったです。

漢人さんは、「不当な扱いを受けている人」「もらえるはずの権利を得ていない人」のために動く印象があります。「議員という肩書き」ではなく「議員にならないとできないこと」があるから議員になったんだと思いました。議員になってもなお、さまざまなボランティアを続けているのも、漢人さんらしいと思います。

おかしいと思ったら変えればいい。それが政治――フィンランドで学んだこと

陳情書を提出し名簿が変わった。手応えがあった。その後、小金井市の女性フォーラムの実行委員も四年間務めた。

それと並行してどろんこ保育所には十二年務めていたが、三十五歳の時に体力的な限界を感じ、貯金に少し余裕があったこともあり次のあてもなく退職した。その年、子どもが五年生になり、仕事を辞めて時間ができたことから小学校のＰＴＡ活動に参加した。

「会長がパワフルでおもしろい女性だったので、その人への興味もあって副会長を引き受けました。ほら、私、昔から補佐的な仕事が性に合っているでしょう?」

当時、「小金井市女性海外派遣事業」という、毎年公募で女性二～三人を海外視察に派遣する事業があった。その年の派遣先に惹かれて作文を書いて応募したら選ばれた。帰国後、報告の冊子にはこんなことばが残されている。

「この時代、この場所、そして自分を見つめ直すために、生の感触を持って異文化・異民族の地を訪ねてみたい……。

フィンランドで出会った人たちとバルト三国の空気は、期待以上のものをもたらしてくれた。私は私の人生を生きたい。最後まで、誰かのためではなく、誰かのおかげでもなく。そして心の通じ合う豊かな関係を創っていきたいと思う。……難しそうだね。

世界は本当に広くって、歴史は深い。ちっぽけな私だからこそ、私自身が大事にして欲ばりに生きなくっちゃ！」

男女平等の歴史が古く、福祉が充実しているフィンランドの視察は刺激的だった。日本との違いを痛感したのは街でたまたま乗ったタクシーの運転手との会話だった。

「日本はフィンランドに比べてとても遅れていると政治の話をしたとき、彼は、当然のようにこう答えたんです。『おかしいと思ったら、変えればいいんじゃないの?』って。政治というのは市民が変えるものだという意識がこんなにしっかりと根付いているのかと、とても驚きました」

さまざまな活動をする中で、頑張れば政治は少し変えられるとは思うようになっていたが、日本では多くの人が政治に不信を抱いていた。それは今でも変わらない。

「政治は不信の対象ではなく、自分たちのもの。市民がそう信じている国だから、福祉や男女平等が進んでいるんだと実感しました」

その後も、市民活動で陳情を出したり、誰かが出る選挙を応援したりすることはあっても、自分が政治家になるなんて考えたこともなかったという。

保育は体力的に難しく、堅実に生きていこうと職業訓練校に通い、簿記二級を取得した。市議選に初めて出ることになったのは一九九七年一月。選挙のわずか二か月前のこと。四月から働く先も内定していたから立候補の誘いを何度も断った。

「昔から、自分が大きな物語をつくってみんなを引っ張っていくより、誰かの物語を聞いて、いいね、そ

フィンランドでホームステイ～女性海外派遣事業（1995秋）

れを応援するよというタイプなんです。議員はリーダーになってみんなを引っ張っていく人がなるものだと思っていました。それに、議員の世界は何かドロドロとした駆け引きが必要で立ち入りたくないというイメージもありました」

政党政治ではなく市民の代表を出したいという思いはあるものの、他に候補者として立つ人が見つからない。これまで市民の思いを議会に届ける活動をしてきて、仲間もいる、思いもあるのに選挙に出る人がいない。

六年生の娘にその話をしたら、こう言われた。

「そんなにウダウダ言うの、あっこらしくない」

娘にそう言われて、思わずスイッチが入った。

「じゃあ、やります」

動き出せば早い。出るからには当選する。

嫌だと思う自分の議員のイメージを変えればいいじゃないかと切り替えた。

「嫌な議員イメージは反面教師。過剰な期待にも応えようとしないと決めました。一つだけ自信があったのは、自分はきちんと政治を信じて市民をやってきたということ。でも、『私が一人で頑張ることはしません。みんなの思いを届けるために、あくまでも議会に出る係として立つのだから、議員になった後も一緒に政治に関わってください』と宣言しました」

そうと決まった途端、たくさんの応援が集まった。市民活動、ＰＴＡ活動の仲間たちが応援に駆けつけ、バックアップをしてくれた。海外派遣でつながった全国の友人がカンパをしてくれた。職業訓練校で出会った友人が事務所スタッフを務めてくれた。あっという間の二か月だった。

ずっと、地域に根ざした生活を通して抱いた素朴な疑問について活動をしてきた。イデオロギーや政党政治ではなく、「普段着の議員」として市民の声を議会に届け、議会の様子を市民に伝える。「市民自治こがねい」というグループの一人として、そんな議員を目指した。

市民として見た「市議会」を市民に開く――小金井市議会議員としての十六年

はじめての市議会。わからないことばかりだった。

議員は「会派」を作るか、どこかの「会派」に所属しなければならない。議場で誰の隣に座るかは大きな選択だ。休憩時間を過ごす部屋は会派によって分かれている。そこで交渉が進むこともある。

議案に賛成か反対かを事前に問われた。討論を聞く前に判断できないというと、事前に通告することが決まっていると迫られた（現在はそのような状況はない）。

「ほとんどが密室での会派による駆け引きで決まり、議会は形式的に進んでいるという印象がありました。市民の視点を持っている議員もいましたが、慣例はなかなか変えられない状況でした」

議員になる前は全く見えなかったこともたくさん見えてきた。とりわけ、市民感覚とかけ離れた議員の特権や慣習が目についた。その筆頭が「議員野球」だった。税金から活動費を出して、女性議員がマネージャーになることが決められていた。議会事務局の職員が

市議会議員１年目の一般質問（1997）

野球部の世話をする。これはいくらなんでもおかしいと声を上げたら、結果的になくすことができた。

「多数決だけで政治は決まらない。議員としてはたった一人でも、その後ろに多くの市民がいる。そのことが他の議員からも見えていたんだと思います」

以前は非公開だった委員会や会議もいくつもあったが、一つひとつ市民に公開できるようにした。

「市議になったからこそ、議会の不条理が見えてきました。それを市民に伝える役目でもありました」

現在、小金井市議会はインターネットで公開され、誰でも傍聴することができる。学童保育の民間委託問題で、保護者が仕事で傍聴に来られないとき、市民が録画をして配信することが許可され、それなら公式に議会が録画公開すればいいということになった。

「議会の専門用語や、議員にしかわからない仕組みをなくしたい、行政を市民にわかりやすく伝え、参加しやすいように変えたいと思って力を注ぎました。政治を変えるには、市民だけでも議員だけでも難しい。議員だからわかることを市民に伝えて、市民が声を上げ、動くからこそ政治が変わっていくんです。市民と議員が連携できることが大事なんです」

行政は議会での議員の質問や発言に大きな影響を受ける。質問されたことに答弁をしなければならないため、職員は応えられるように取り組むようになる。

「例えばグリーン購入。環境に配慮した物品や再生紙の比率などを質問すれば、職員は議会資料のために各課の状況をチェックすることになります。

給食の民間委託問題についても、民間委託を止めることはできませんでしたが、『民間委託は、経費を削減して給食を充実させるため』という答弁があったので、削減した経費が確実に給食の改善になるように使途を毎年チェックして、実行させました」

政治家になろうと思ったことはなかったが、「政治家」というイメージが自分の中で大きく変わった。

「政治は生活に密接につながっている。自分の思いを実現し、未来を描くことが政治です。政治を汚いところに置いたままにしないで、市民に政治を取り戻す。そのために働くのが政治家だと思います」

Column　私と漢人さん _ 宇野祐子

物静かなで控えめなファイター漢人

市立小金井保育園の父母会会長をしているときに、行革で保育園を民間委託にという話が持ち上がり、政治に興味を持たざるを得なくなりました。その後、同様に委託対象とされていた学校給食について活動する「小金井の給食を守る会」に入った私は、子どもの環境を通して、政治が私たちの生活に影響を与えることを再び実感しました。自分たちが動かなければ、されるがままになってしまう。意思表示をしなければダメだと思ったんです。その頃から、漢人さんにはよく相談に乗っていただきました。

漢人さんは、普段は物静かでどちらかというと控えめな印象もある方なのに、ここは通さなければと思うところではエネルギーと持続力が圧倒的です。議会などでの熱の入った迫力ある発言の様子はまさに「ファイター漢人」というイメージ。

給食の民間委託阻止は叶いませんでしたが、漢人さんらのご尽力で、アルマイトからプラスチックに変えられそうだった食器を、強化磁器のものにすることができました。私たちからの資料提供だけに頼ることなく、自らメーカーに連絡を取り調査してくださり、積極的に関わってくださった漢人さんにはとても感謝しています。市民の思いに寄り添いつつ、しっかりとご自分で判断し、行動される漢人さんの活躍をこれからも期待しています。

Column　私と漢人さん _ 髙坂 勝

後方からのリーダーシップ

私は、米作りと移住斡旋などの地域おこしや、経済成長なき人口減少を希望して、活動や執筆、講演などをしています。

漢人さんから声がかかり、「緑の党グリーンズジャパン」初代共同代表を務めました。政治的な発言はそれ以前からずっとしていますが、政治活動はしていなかったし、緑の党の代表は厳しい条件をお伝えして引き受けないつもりでした。いくつか断る理由を用意してお会いしたのに、こちらの条件を全て受け入れられてしまい、断る理由がなくなって、引き受けることになりました。

漢人さんは人として優しい方ですが、ここぞというときには譲らない。きっちりと詰めていくことができる方です。みんなをグイグイ引っ張るというより、くさびを打ちながら、確実に進めるように下支えをするような後方からのリーダーシップを持っている。「私が私が」という人は一つ間違うとエゴになってしまいますが、漢人さんは「みんなを支える」一方で、いざというときには「非常に説得力のあることばで政治を動かすことができる」稀な人。かっこいいですよね。

筋が通らないことを言っていると、「それは違うんじゃないの」とズバッと指摘が飛んでくる。余計なことは話さない。私利私欲でなく信念で動く漢人さんに、全面的に信頼を持っています。

小金井の「はけ」への思いを届けたい——今の想い

一九九七年から二〇一三年まで、市議会議員を四期十六年務めた。議員以前から関わってきた放射能測定も、学校給食やゴミ減量、環境問題なども、子どもたちの未来を守るためには欠かせないことだった。

四期目には、小金井で市民と議会をつないでくれる若い世代の新しい人が出てきた。バトンを渡して、市議の活動は引退しようと思うに至った。

「一部の既得権を守ることを優先し、政治不信を拡大してきた政治に未来はないとずっと感じていました。このままではダメだという危機感と、未来の希望を語れる政治を取り戻したいという強い思いで、既成政党とは違うアプローチはできないかと考えたのです。

ドイツ緑の党大会に招かれ脱原発のエール交換（2012秋）

世界には環境や公正を最優先にする市民発の政党『緑の党』がある。日本にもつくりたいと思いました。

市議時代につながった全国の仲間たちの間で東日本大震災を契機に設立機運が高まり、結成準備委員会に参加し、二〇一二年の結成時から現在まで運営委員を務めています。

世界では、気候危機に取り組む若者の支持を受けて『緑の党』が大きく躍進しています。今こそ必要なメッセージを打ち出せる政党だと思っています」

「緑の党」との出会いは、どろんこ保育所にいた頃のこと。保護者であるドイツの特派員、ジョージにこうたずねられた。

「カンドはいろいろな市民活動をしているけど、日本に緑の党はないの？」

「緑の党」は、世界では一〇〇近い地域で活動している。その時はなぜ日本にないのかと不思議に思っただけで、自分が関わるとは思わなかった。前面に立つのではなく、誰かを支えていきたいと考え、活動の軸を移して四年が経った。

今も精力的に活動している原動力は、何なのか。

小金井市南部に都が道路を作る計画を立てていることを知らない市民は半数を上回る。美しい水が湧き、鳥や動物も、人も集い市民に愛される「はけ」と呼ばれる国分寺崖線一帯を分断する二本の道路計画がある。ひとたび道路が通れば生態系は崩れ、元に戻すことはできなくなる。

「はけ」のそばを流れる野川は、五十年ほど前、洗剤の泡だらけの生活排水が流れていた。今の美しい野川は、都が下水を整備し、市民の手でゴミを拾い、ようやく取り戻した姿だ。別荘地でもあった「はけ」に立つ歴史的な建物が保存され、木々などが残され、豊かな生態系を守ることができたのも小金井市民の強い願いによるものだ。

市民も、市議会も、市長も反対や見直しを求めるこの計画を、東京都は「東京都全体の道路行政として必要だ」として進めようとしている。

「私の人生で最も大事にしてきた『自分のことは自分で決めたい』『地域のことはその地域で決める』ということが根幹から揺らいでしまう。これは小金井全体の大きなテーマとして、絶対に譲るわけにはいかない。

気候変動や環境破壊が大きな問題として世界中で取り上げられているこの時代です。そして、コロナ禍で活動が制限される中、身近な自然環境がとても大事だとみんなが再確認しています。そんな時代に大きく逆行する計画が莫大な税金をかけて進められようとしているんです。この計画を止めるには、もっと多くの人の思いを可視化しなければなりません。

小金井にはこんなに素敵なところがあると誰もが自慢できるあの場所を残すために、都議会と市民をつなぎ、私にできる限りのことをしたいと思っています。

この地域からの取り組みが、次世代と環境への責任を二の次にしてきた政治を変え、希望を取り戻していく大きな力になると思うのです」

望む未来を夢見て
思い描くのは
政治をする上で必要なこと
夢も見られない社会は
そこで終わってしまう
夢を見て思い描きながら
なんとか今を楽しく生きる
そして少しずつでも前に進めたい
その積み重ねがきっと
子どもたちの未来につながっている
今の私にできることは
あきらめないこと
あきらめなければ政治は変わる

武蔵野公園くじら山はらっぱ（2017春）

かんど あきこ　年譜

1960	静岡県生まれ
1965	東京へ
1975	都立武蔵村山東高校入学
1980	東京学芸大学入学（1985年中退）
1983 ～ 1995	本町「どろんこ保育所」で保育者として働く
1992 ～ 1995	小金井市女性フォーラム実行委員（副委員長・委員長など）
1995	小金井市女性海外派遣事業でフィンランド、バルト３国へ 緑小PTA副会長
1997 ～ 2013	小金井市議会議員（４期16年）
2007	なくそう！議員特権キャンペーンに取り組み、全国で特権見直しを一気に促進。都議会の永年勤続議員表彰も廃止へ。ワイドショー（みのもんたの朝ズバ！）出演
2012	著書「『内部被ばく』こうすれば防げる！放射能を21年間測り続けた女性市議からのアドバイス」（文藝春秋）刊
	市民発の環境政党「緑の党グリーンズジャパン」の設立に参加
2017	東京都議会議員選挙に小金井市選挙区で立候補。次点（13,531票）
	「チェンジ東京！小金井の会」代表
	「緑の党グリーンズジャパン」運営委員・東京都本部共同代表

漢人あきこ

フライパンひとつ持って
政治が「自分ごと」になるとき

初版　2021年1月30日
第二版　2021年4月30日

構成・文　太田美由紀
企画　陣内直行
編集　横須賀雪枝
デザイン　安田桂子
写真　井上茂（表紙,P7,P26-27）
安田桂子（P4-5）
ほか 漢人あきこ提供
発行者　チェンジ東京！小金井の会

http://www.kandoakiko.com
〒184-0003 小金井市緑町 5-19-14-605
TEL：042-386-1503
changetokyo.k@gmail.com

〈討議資料〉